



TITLE:

# 資金の増減伸縮の機構

AUTHOR(S):

小島, 昌太郎

---

CITATION:

小島, 昌太郎. 資金の増減伸縮の機構. 経済論叢 1937, 45(6): 743-762

ISSUE DATE:

1937-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131037>

RIGHT:

# 京都市大學經濟學會 經濟叢論

第 四 十 五 卷      第 六 號

昭和二十二年十二月一日發行

## 論 叢

資金の増減伸縮の機構……………

經濟學博士 小島 昌太郎

社會的文化的變動の形式……………

文學博士 米田 庄太郎

資本主義の純粹理論……………

文學博士 高田 保馬

## 時 論

國稅の部分的改正……………

經濟學博士 沙見 三郎

## 研 究

ナチス政策と獨逸社會保險の改革……………

經濟學士 中川 與之助

明治維新の經濟的意義……………

經濟學士 堀江 保藏

再保險の經濟的本質……………

經濟學士 佐波 宣平

立地理論の一展開……………

經濟學士 菊田 太郎

## 說 苑

ゲルストナーの經營分析論……………

經濟學士 岡部 利良

スウィゲティのダンピング理論……………

經濟學士 岡倉 伯士

## 附 録

新着外國經濟雜誌主要論題  
本誌第四十五卷總目錄

# 經濟論叢

第四十五卷 第六號 (通卷第貳百七拾號) 昭和十二年十二月發行

## 論 叢

### 資金の増減伸縮の機構

小島 昌太郎

本論は、金融の動態、換言すれば、通貨若しくは資金の増減伸縮に關する全般の機構に關する卑見を簡單に取纏めたものである。私は、最近、金融に關する事項を、或は理論として、或は時事問題として、論述したのであつたが、それらは、いづれも部分的のものであるから、いまこゝに、一應、それらの各問題の素地たる金融市場の動く姿を、一括して、鳥瞰的に描寫せんと試みるのである。それゆゑ、或は入門者の説明の所もあるべく、或は従前の諸論文と重複する個所もあるべく、或は、簡に過ぎたる所もあるであらう。その説明の本論に於て不足する所は後日の論述に於て詳しくする積りである。讀者の諒承を乞ふ。

#### 一

最も廣義に解するとき、金融とは、通貨の形態に於て、購買力の移動することである。従つて、金融といふも、通貨の流通といふも、共に同一の事柄を異なる觀點より見たものであつて、その形態に着目すれば、通貨の

流通であり、その内容に着目すれば、金融なのである。

更に、金融及び通貨の流通といふことは、資本の廻轉といふことも密接なる關聯をもつ。すなはち、資本の廻轉といふことは、資本をもてるものが、他人との交換關係に於て、通貨たる形態に於ける資本を、財貨たる形態に於ける資本に轉換し、更に、この財貨たる形態に於ける資本を、通貨たる形態に於ける資本に復歸せしむることである。この企業の内部に於ける資本の廻轉は、とりも直さず、通貨の流通、購買力の移動を惹き起す原動力となるものである。

すなはち、各企業は、相互に關聯して居ると共に、一方に於ては消費者に、他方に於ては、勞働者に關聯して居るのであるから、この關聯の下に於て、通貨が、從つてまた購買力が、消費者より出で、この企業に入り、更にそれを出て、他の企業若しく勞働者に入り、その勞働者はまた消費者たるにより、それより出で、企業に入るのである。この關聯せる運動の全體が金融であり、通貨の流通であり、この運動の一環を、一つの企業の内部に限局して見るとき、これを資本の廻轉といふのである。そして、各人の所得は、これを全體として見るときは、結局、産業的活動より生れるのであり、産業的活動より生れるものは、各企業の資本の廻轉によつて産み出さるのであるから、この關係に於て資本の廻轉といふことが、金融及び通貨の流通の原動力たるのである。

金融といひ、通貨の流通といひ、また資本の廻轉といひ、いづれも、みな、前述の如く、購買力の移動現象である。この購買力の移動は、全く相反する所の二つの異なる目的を以て行はれる。一つは購買力の喪失であり、他は購買力の増殖である。消費者の立場に於ける購買力の移動は前者であり、企業の立場に於けるそれは後者で

ある。

企業は、通貨の形態に於ける購買力を、財貨の形態に轉換し、更にそれを通貨の形態に轉換することによつて、購買力を増加せしめんことを目的とするものである。この場合に於ける購買力が、資本といはるゝものである。そして、通貨の形態にある資本が、資金といはるゝものであり、財貨の形態にあるそれが、資本財といはるゝものである。然るときは、購買力の移動といふことを、企業を中心として見れば、これを資金の移動と見做すことが出来る。狹義に於て金融といふときは、この意味に於ける資金の移動のことである。

## 二

購買力の移動も、資金の移動も、いづれも通貨の形態に於て行はれる。その通貨なるものは、貨幣經濟の初期にあつては、本位貨幣と補助貨幣とであつたが、貨幣經濟の進歩と共に、兌換銀行券がこれに代るものとなつて、並び流通することとなつた。我が國に於ては、貨幣法に規定する所の貨幣、及び、兌換銀行券條例に規定する所の兌換銀行券がすなはちこれである。

貨幣經濟が發達し、銀行機能が完備して、信用經濟に移行して後は、銀行預金がそのまゝに移讓せらるゝことによつて、支拂が決済せられることゝなつた。それゆゑに、銀行預金は、本位貨幣、補助貨幣、兌換銀行券と等しく、通貨として、金融界に登場することゝなつたのである。この場合、預金移讓の手段たる所のものは、主として、小切手若しくは手形であつて、この小切手若しくは手形などによつて、預金が支拂の決済に働くとき、これを預金通貨といふ。そして、これに對して、本位貨幣、補助貨幣及び兌換銀行券を現金通貨といふ。

銀行預金なるものは、信用經濟以前の時代に於ては、商取引界に於て、餘剰となる現金が、一時預け入れられて居る状態のものであつた。従つて當時にあつては、通貨は現金通貨ばかりであり、その本來の所在は、商取引界であつて、銀行は、その一時の休み場所たるに過ぎなかつた。

然るに、信用經濟の發達した今日にあつては、むしろ、銀行なるものが、通貨の本來の所在である。通貨の大部分は、そこに預金として待機して居つて、通貨の本務たる所の支拂の決済のために働く場合に、或は、現金通貨として商取引界に出て行き、或は、小切手手形などの形に於て、預金の移讓によつてその役目を果すのである。従つて、全般の銀行を一體として見れば、預金通貨の場合に於ては、通貨は銀行の外に出づることなくして支拂の決済に働くのであり、現金通貨の場合に於ては、支拂の決済に働くために、一時、銀行の外に出づるけれども、その働を終るならば、早速、銀行に還り來るのである。それゆゑに、通貨は、支拂の決済に働かない間は、預金の形態に於て銀行に、待機しつゝ潜在して居るのである。この關係よりして、銀行の預金を潜在通貨といふ。

### 三

資金は、通貨の形態に於ける資本である。従つて、通貨が増加することなければ、資本の増加があつても、資金の増加はあり得ない。また、通貨が減少することなければ、資本の減少があつても、資金の減少はあり得ないのである。

然らば、通貨なるものは、如何にして増加し、または減少するか？ これは、今日の信用經濟の下に於ては、潜

在通貨たる銀行預金は如何にして増減するか、といふことに、その根本問題がある。併しながら、これについては、更に注意しなければならぬ問題がある。それは、銀行預金なるものは、増加することの外に膨脹するものであり、減少することの外に收縮するものであるといふことである。銀行預金も、この増減といふ問題については、液體と同様に、その實量と形量とを區別して觀察しなければならぬ。その實量の増減は、形量の増減を伴ふけれども、而も形量の増減は、實量の増減なくしても、或程度までは可能なものである。従つて形量の増減は、特に、これを形量の膨脹と言ひて、實量の増減と區別して觀察することとする。

さて、銀行預金の實量の増加は、金本位制度を採用する國にあつては、商品的金の貨幣的金となり、それが銀行に預け入れられることによつて起る。その主なるものは、國內產出の金と、海外輸入の金とである。これらの金が、我が貨幣法第十四條の「金地金ヲ輸納シ金貨幣ノ製造ヲ請フ者アルトキハ政府ハ其ノ請求ニ應スヘシ」といふ規定に従ひ、金貨幣に製造せられたるときは、それによつて、金貨幣たる現金通貨の増加を來すのであるけれども、それが銀行に預金せられることによりて、預金の實量増加、すなはちその實質的増加を來すのである。

併しながら、我が國の今日の如く、日本銀行の金買入値段が、貨幣法に規定する金の貨幣價值より高きときは金は金貨幣に製造を求められることなく、日本銀行に賣却せられることとなる。然る場合に、日本銀行が買上代金として支拂ふ所の小切手は、銀行に預け入れられることとなるから、これによつて預金の實質的増加を來すこととなるのである。

海外よりの支拂金を受取るべき手形を所持するものが、その割引若しくは賣却によつて受領する所の手取金

を、銀行に預け入れることは、海外より輸入したる金の賣却手取金を預け入れたる場合と同様に、預金の實質的増加を齎らすこととなる。それゆゑに、輸出超過といふことは、銀行預金の實量増加を來す所の最も重要な原因である。

更に、政府及び日本銀行は、我が國民經濟全體の中にあるものであるけれども、民間金融といふものを觀察する場合には、その外にあるものと言はねばならぬ。然るときは、政府の支拂と日本銀行（大藏省預金部も同様）の貸出とは、共に、民間銀行の預金を實質的に増加することとなるものである。政府の支拂はすべて日本銀行宛の小切手を以て行はるゝものであるから、受領者は直ちにこれを銀行に預け入るゝの外なく、日本銀行の貸出は、銀行に對してのみ行はるゝもので、その銀行は取引先に對してこれを貸付するのであるが、これを借受けたる取引先は、それを支拂に充てるに當り小切手を用ゐるがゆゑにこれの受領者はまた直ちにこれを預金とするからである。

商品的金の貨幣的金となりて預金せらるゝこと、外國受取金の預金せらるゝこと、政府支拂金の預金せらるゝこと、日本銀行貸出金の預金せらるゝこと、この四つが、實質的の銀行預金を構成するものであり、従つてその實量の増加を齎らすものである。そして、それが、とりも直さず、潜在通貨の實量増加を惹き起すものである。

銀行預金を、従つて潜在通貨を、實質的に減少し、その實量を減少するの事情は、右の逆なる場合である。すなはち、貨幣的金が商品的金となること、——それは金の海外輸出が主なるものである——、海外支拂の手形を買入れること、政府に租税、公債應募及びその他の納金をなすこと、日本銀行よりの借入金を返却すること、この四つである。



#### 四

銀行預金は、その實量の増減といふことがあるばかりではなく、その形量の伸縮といふことがある。すなはち一〇〇リットルの水に水リットルの水を注入すれば、その水の量は一〇一リットルとなるが、これは實量の増加である。然るに、一〇〇リットルの水に熱を加ふれば、それによつても、その量は、一〇一リットルとなる。これが形量の膨脹である。

銀行預金の形量膨脹は、銀行の投資によつて起る。すなはち、銀行は、その預け入れを受けたる資金を、割引貸付、有價證券買入などの方法によりて投資するのである。それらの場合に於て、貸付を受けたるものは、その資金を直ちに支拂に充てるであらうが、その資金は支拂を受けたものによつて、直ちに銀行に預け入れられる。また、割引を受けたものも、有價證券を賣却したものも、その手取金は、やはり、これを預金とする。それゆゑに、全般の銀行を一體として見れば、一方に於て、投資せられたる資金は、他方に於て、預金となるのである。

たゞ、これに例外をなすものは、政府公債に銀行が應募する場合である。この場合に於て、政府は、普通銀行に預金をするものでないから、この公債に投資したる金額は、銀行預金の増加を齎らすことゝはならない。併し、それは、政府の日本銀行に於ける預金を増加することゝなる。

銀行の投資が反轉して出來た預金は、銀行と借受人及びそれより支拂を受けたるものとの間、若しくは銀行と割引受領者または證券賣却者との間の、機構によつて創作せられた預金である。その意味に於てこの預金は、前に述べたる預金と、その性質を異にする。従つて、この預金は、前に述べたる預金が實質的預金と名づけられる

に對して、創作的預金と名づけられる。

創作的預金は、實質的預金として預け入れを受けたるものゝ投資によつて、その反轉として出來たものであるから、預金が實量に於て増加したのではなく、その形量に於ける膨脹である。且つ、創作的預金は、銀行投資の反轉であるから、銀行が投資する範圍を越えて、出來上るものではない。併しながら、創作的預金は、預金として資金の預け入れを受けたものであるといふ點に於ては、實質的預金と異なる所のないものであるから、銀行は更にこれを投資に用ゐることが出来る。然るときは、その投資せられたる資金は、また反轉して預金となる。

かくて、實質的預金は、銀行の投資によつて、創作的預金となり、それが更に投資と預け入れとを反復することによつて、甚だしく膨脹するものである。併しながら、それはもとより投資せらるゝ金額の範圍に限られるものである。投資せらるゝ金額の範圍は、銀行の支拂準備と、擔保との二つの關係に於て制限を受ける。

銀行の支拂準備といふは、預金の引出に應ずるの準備である。預金が要求拂のものであるならば、銀行は何時その支拂の請求を受けるかも知れない。併しながら、この場合に於ても預金者が甚だ多數なるときは、各預金者の事情は、吾人の面貌が萬人悉く異なるが如く、みな異なるものであるから、すべての預金が、一時に全額の引出を請求せられるものではなく、プロバビリチーの法則に従ひ、その引出請求を受くる金額は、預金の口數が多ければ多きほど、全金額に對して小さき割合となるものである。殊に、一方に引出があれば、他方に預け入れもあるもので、出入相混交するものであるから、要求拂預金も、或割合の支拂準備をもつことによつて、殘餘は貸付その他の投資に向けることが出来るのである。かくて、銀行の投資は、預金に對し或る率の支拂準備の用意をなし

て後に初めて可能なる所である。

定期間後拂戻をなす預金にあつては、その期間内は、支拂準備をなすの必要はない。併しかゝる預金も、日々に預け入れられるものであるから、また日々に、その期限の到来を見る關係にある。従つて、かゝる預金も、これを全體として見るとき、常に、或る率の支拂準備を必要とするのであつて、その殘餘のみが投資に充て得るものである。

かくて、全般の銀行を一體として見るとき、第一次の創作的預金は、實質的預金より支拂準備を控除したる金額であり、第二次の創作的預金は、第一次の創作的預金より支拂準備を控除したる金額であり、以下みな然る關係に於て、創作的預金として膨脹するのである。

いま、實質的預金を  $a$  とし、支拂準備率を  $r$  とすれば、實質的預金  $a$  は、それより創作的預金として膨脹するものを加へて、理論的には、次の公式の極限まで、伸びる可能をもつものである。

$$a + a(1-r) + a(1-r)^2 + \dots + a(1-r)^n = \frac{a}{1-(1-r)} = \frac{a}{r}$$

すなはち、一百萬圓の實質的預金は、一割の準備率の下に於ては、一千萬圓に、八歩の準備率の下に於ては、一千二百五十萬圓にまで、理論的には、膨脹の可能をもつものである。

併しながら、これは、基本たる所の實質的預金と準備率の關聯から見たる極限である。預金の膨脹は、他方に於ては、擔保の提供に伴ふものである。銀行の貸付及び割引は、原則として擔保に依存して行はれるものであるからである。それゆゑに、 $a$  が  $\frac{a}{r}$  にまで伸び得るにしても、それは、 $\frac{a}{r}$  まで追隨し得る所の擔保が提供せられる

ことによつて可能なのである。擔保として提供せられるものがそれ以内であるならば、預金の膨脹もその範囲内に止まる。併しながら、また、擔保として提供せられるものがそれ以上に存在し、貸付割引の請求が盛であつても、基本たる實質預金が $a$ であり、準備率が $r$ である限りは、預金の膨脹は、 $\frac{a}{r}$ を超ゆることが出来ない。前の場合は、金融が緩漫なるときであり、後の場合は、金融が逼迫せるときである。

$a$ の實質的預金が $\frac{a}{r}$ まで膨脹するといふことは、貸付割引などに銀行の投資する資金が、そのまゝ預金に反轉することを前提としたものである。若し、その資金の一部が、現金通貨として商取引界に滞留するものであるならば、それだけ預金の膨脹は制限せられることとなる。併しながら、現金通貨なるものは、小賣商業の隆昌に伴して増減するもので、必ずしも銀行投資に随伴するものではない。ゆゑに、貸付割引などによつて、現金通貨が商取引界に出づることがあるにしても、それが小賣商業の隆盛によるのでなければ、やがて幾何もなく、銀行に復歸することとなるものである。従つて $a$ は擔保が追隨し得る限りは、實際に於ても、大體、 $\frac{a}{r}$ まで膨脹し得るものと見ることが出来る。

## 五

預金の膨脹は、右に述ぶるが如く、實質的預金を準備率を以て除したる商にまで、擔保の追隨する限りは、伸び得るものである。従つて、擔保が追隨するものとせば、準備率が小なるほど、預金の膨脹は大なるものである。併しながら、準備率は、客觀的標準によるべきものであつて、銀行經營者の任意に縮小し得る所ではない。

然るに、こゝに、金融の客觀的情勢が、支拂準備率を自然に縮小せしめ、従つて、預金の膨脹は益々大ならし

むる場合がある。それは、經濟界が活況を呈し、各銀行がいづれも齊しく貸出を増大する場合である。かゝる場合には、或る銀行の貸出したる資金が他の銀行に於て預金となり、他の銀行の貸出したる資金が或る銀行の預金となり、相互に貸出したる資金がまた相互に預金として戻り來ることとなるため、各銀行の手許資金は、貸出しをなしても減少することゝはならないのである。

貸出を行つても、右の如き關係により、手許資金が減少することなきの状態が繼續するときは、銀行は、更に貸出を繼續することとなる。然るときは、貸出の増加、従つて預金の増加のため、手許資金は減少せずとも、その中の遊資たる部分は減少して、準備金たる部分が増大し、終には、その手許資金の金額が、従前のまゝの準備率に於ては、その全額が支拂準備金たるものとなるに至る。

然るときは、遊資たる部分は、全くなくなり、貸出餘力は皆無の筈であるけれども、手許資金の減少しないことのために、銀行は更に貸出を繼續することとなる。この場合に於ては、準備率として従前の率が尙ほ正當なるものならば、銀行は、資金なき貸出をしたこととなる。併しながら、かくの如き場合の貸出は、各銀行が相互に貸出たる資金が、相互に預金となる關係の下に於ては、可能なる所たるのみならず、プロパビリテイの法則は、預金の金額及び口數が多くなるに従つて、準備率は、少くて差支なきことを教へるものである。それゆゑに、かかる場合の貸出は、資金なき貸出ではなくして、自然の情況の下に、準備率が低下したものと云ふべきである。

## 六

預金すなはち潜在通貨の膨脹は、かくの如き限度にまで起り得るものである。すなはち、それは $\frac{a}{r}$ にまで

伸び得るものであるが、更に各銀行が齊しく貸出を擴張するが如き時期に於ては、相互に貸出が預金となり、而も手許資金を減少することなきの關係により、自ら準備率の低下を齎らし、預金すなはち潜在通貨は、従前の準備率に於ける $\frac{1}{2}$ を超えて膨脹することとなるものである。

然らば、預金は、如何にして收縮するか？　こゝに言ふ預金の收縮とは、膨脹の逆なる場合のことであつて、減少とは異なる。すなはち實質的預金の減少ではなく、創作的預金の收縮である。この收縮は、投資の回收によつて起る。すなはち、貸付が返還せられる場合には、その返還者は何人かより領收したる資金を以てするのであるが、それはその人の預金より引出されて返還者に支拂はれたものである。従つて、一方に貸付が返還せられる場合には、他方に、預金が引出されて居るのである。

また、銀行の割引したる手形が満期日に至つて支拂はれたるときは、その資金は手形支拂人の預金より引出されてなされたものであり、銀行が手持の有價證券を賣却したるときは、その代金は、買手の預金より引出されて支拂はれたものである。それゆゑに、全般の銀行を一體として見れば、銀行が投資を回收したるときは、その預金は收縮するものである。

併しながら、銀行が手持國債の償還を受くることによつて、その投資を回收したる場合にあつては、その資金は、政府の日本銀行にもつ所の預金より支拂はれたのであるから、民間預金の收縮を惹き起すことゝはならぬ。

各銀行が齊しく貸出を擴張するときは、預金は一般的に膨脹すると同様に、各銀行が齊しく貸出を回收すると

きは、右に述べたる關係により、預金は一般に收縮することゝなるものである、預金の收縮は、各行に於ける預金の引出に基く。そして預金の引出は、手許資金の減少を惹き起すものであるから、銀行が手許資金を豊富にせんとするために、各銀行が齊しくその貸出回收の舉に出づるならば、手許資金はそれによつて決して増加することゝはならず、むしろ預金は、それによつて更に收縮するの傾向をとるに過ぎない。

## 七

實質的預金は、常に二重の存在に於てあるものである。例へば金を日本銀行に賣却したる手取金十萬圓が銀行に預けられたとすれば、その手取金なるものは、日本銀行の小切手を以て支拂はれるものであるから、その預金確定するといふことは、その預け入れを受けた銀行がこの小切手を日本銀行に呈示して、その銀行の預け金として十萬圓が受入れられることによるのである。それゆゑに、金の十萬圓の賣却は、銀行の預金の十萬圓と、日本銀行の預け金の十萬圓と、二つの十萬圓の預金として存在することゝなるのである。海外宛受取手形の賣却の場合、政府支拂金の預け入れの場合、日本銀行貸出の場合等に於ても、普通銀行の預金と、日本銀行の預金若しくは横濱正金銀行所持の外貨との二重の存在となるのである。

預金が二重に存在するときは、それが預金通貨として働く場合には、また二重の働きをなすものである。すなはち、銀行が貸付割引または有價證券の買入をなす場合には、その日本銀行にもつ所の預け金を以てなすのであるが、その支拂金は、他の銀行の預け金に移轉するのであるから、銀行全般の預け金としては減少することなく元のまゝである。そして、かゝる銀行の支拂、従つて、日本銀行預け金の移轉は、もとより、預金者の銀行に於

ける預金を減少することゝなるものでないことは言ふまでもない。それゆゑに、預金者は、彼自らの支拂のために、小切手を振出して、その預金を通貨として働かしむることが出来る。

預金者が小切手を振出したる場合に於ては、その小切手の受領者が、同一の銀行の取引先たる場合には、銀行は、自行の内部計算に於てこの支拂の決済をなすことが出来るけれども、他の銀行の取引先なる場合には、その銀行に對して、この小切手の支拂をしなければならぬ。この支拂は、手形交換所の交換機構により、小切手の宛名銀行の日本銀行にもつ預け金を、小切手受取人の取引銀行の預け金に移すことによつて行はれる。それがため、預金者が小切手を振出して他の銀行の取引先に支拂ひたるときは、自行の日本銀行に於ける預け金は、それに追隨して減少するものである。従つて、前に述べたるが如くに、銀行の日本銀行に於ける預け金と、預金者のその銀行にもつ預金とは、獨立的に活動し得るものではないものゝ如くに見える。

併しながら、これは、一個の取引のみを見るがゆゑに、然る結果を眺めることゝなるのである。今日の小切手取引の實際に於ては、頗る多數の預金者が、比較的少數の銀行を中心として、小切手の授受をして居るのであるから、この少數の銀行間に於ては、相互に、受取勘定と支拂勘定とが交錯して居つて、その相對應する金額は、相殺によつて決済せられることゝなつて居るから、銀行間に於ては、自行の預金者が他行の預金者に小切手支拂をなしても、必ずしも、自行の日本銀行にもつ預け金を他行に移すことゝなるものではなく、これを移すことがある場合にも單に相殺不足額のみを移すのであつて、自行の受取額が他行への支拂額よりも超過する場合には、むしろその差額を受領することゝなるのである。かくの如き關係にあるがゆゑに、實質的預金は、二重の存在をな



すのみならず、またその大部分に於て二重の活動をもなすことが可能となるのである。

## 八

右に述ぶる所により、預金の、すなはち、潜在通貨の、増加減少及び膨脹收縮の機構を説明したのである。

通貨は、この預金といふ形態に於て、潜在通貨として待機の状態にあり、支拂の決済の必要あるに臨んで、或は手形小切手の類により預金通貨として活動状態に置かれ、或は現金通貨として、銀行より引き出されて、活動状態に置かれるのである。

謂はゆる預金通貨なるものは、右に述ぶる如く、この潜在通貨が預金のまゝで、支拂の決済に働く場合の預金のことであるから、預金通貨の増減といふことは、前述の預金そのものゝ増減伸縮と同じことである。

然るに、現金通貨の増減は、これらとまた趣きを異にする所がある。現金通貨の中で、本位貨幣たる金貨幣は曩に述べたる如く、産金及び輸入金が、所有者の請求により、政府（造幣局）に於て金貨幣に製造せられることによりて増加し、海外に輸出せらるゝことによつて減少するものである。併し今日に於ては、金貨幣に製造を請求するものはなく、總て日本銀行の買上を求むることゝなるから、産金及び輸入金の増加は、金貨幣たる現金通貨の増加を來すことゝはならず、前述の如く實質的預金の増加となるのである。

金貨幣は、民間の請求に基く製造の外、兌換の停止せられてゐない場合には、日本銀行保有のものが、民間銀行の預け金の引出若しくは貸出の請求に於て、金貨幣を以てする支拂が求められたる場合に、その流通高を増加し、更に兌換銀行券の兌換の請求によつても、その流通高を増加する。そして海外の支拂に充てられるときに減

少する。

補助貨幣は、政府に於て製造せられるものであるけれども、その製造せられたるものは、政府の特殊なる預金として、日本銀行の預金となる。そして、日本銀行兌換券と共に、民間銀行が、日本銀行にもつ所のその預け金の引出として、これらを以てする支拂を求めたるときに、發行せられる。民間銀行が、日本銀行にもつ所の預け金が不足なるときは、貸出によつて發行せられる。

いづれにしても、現金通貨は、金貨幣の製造が民間の金所有者によつて求められる場合の外は、悉く、日本銀行の預け金の引出か、貸出か、この二つの方法によつて發行せられ、その流通高を増加するものである。そしてその流通高が減少するのは、銀行が、これを日本銀行に預け入るか、またはその借受金の返済をなすために、これを用ゐたる場合である。

銀行が日本銀行に對し、現金通貨を以てする拂出を請求するは、その手許現金在高が、支拂準備金として不足する場合である。その手許現金在高が減少するのは、取引先により、預金の引出として、または、貸出として、現金支拂を求めらるゝ金額が、預金の預け入れとして、または貸出の返済として、現金の拂込を受ける金額に超過するによる。

元來、現金なるものは、小賣取引に主として用ゐられるものである。従つて、小賣取引が次第に活潑となれば現金通貨の必要が倍加し、小賣取引が次第に衰微すれば、その必要が減退するものである。前の場合には、銀行より現金を以てする支拂の求められることが多くなり、後の場合には現金を以てする銀行への拂込が多くなる。

従つて、現金の流通高は小賣商業の隆昌に伴ふて増減するものである。

殊に、金融界の健全なる場合には、現金に自動的收縮性があつて、必要以上に、流通界に滯留するものではない。この自動的收縮性は、今日の銀行はその預金に利子を附けることゝ、現金通貨の大なる部分が貸出として發行せられて居り、従つて利子を負擔して居るものなることゝの關係により、何人かの手許に現金通貨が、多少たりとも纏るときは、直ちに銀行に預け入れられるといふ必然の事情より生ずるのである。

## 九

銀行預金の膨脹は、實質的預金を基礎として、その上に發展する所の創作的預金の構成によるものである。この場合の實質的預金は、曩に述べたる所の四つの淵源より預け入れられたるものが然るのであつて、その預け入れの場合の通貨形態が、預金通貨たると現金通貨たるとを問はない。これを逆に言へば、預金通貨たると現金通貨たるとを問はず、この四つの淵源より預け入れられたるものは、實質的預金であるけれども、然らざる場合には實質的預金ではない。

或は現金通貨を以て預け入れられたるものは、實質的預金であつて、預金通貨を以て預け入れられたるものは、創作的預金であると考えらるものがあるかも知れないが、それは誤である。銀行より現金通貨を以て貸出を受けたるものが、これを支拂に充て、その受領者がこれを預金となしたるときは、その預金は貸出資金の反轉より成るものであるから、創作的預金であり、金の買上代金として日本銀行が振出したる小切手が、銀行に預金として預け入れられたるときは、實質的預金である。

かくの如く、現金通貨を以てする預金の預け入れは必ずしも實質的預金の増加を齎らすものではないけれども、現金を以てする預金の引出は、實質的預金の減少と同じ結果を惹き起すものである。その預金が實質的預金として出来たものであると、創作的預金として出来たものであるとを問はず、現金を以てする預金引出は、實質的預金の減少と同じこととなるのである。

銀行は預金に對する支拂準備として、現金と預金とを用意して居る。謂はゆる手許現金在高は、現金を以てする引出に應ぜんがためであり、日本銀行にもつ所の預け金は、手形の交換尻決済に充てんがためである。銀行の手許資金が、その現金と預け金とを合せて、支拂準備金として必要なる額に超過するときは、その超過額は遊資であり、貸付、割引、有價證券の買入その他の投資に充つることを得るものである。

いま、全般の銀行を一體として見て、その次第に貸出さるゝ資金が、また次第に悉く預金となるものとすれば、手許資金の金額は同一であつても、而もその構成に於て支拂準備たる部分が漸増し、遊資たる部分が漸減することとなり、終には、その手許資金は、少しも金額の變更なく、その全額が、支拂準備金となり、遊資たる部分は皆無となる。その場合に至つて、實質的預金が創作的預金として發展して、膨脹の極限にまで達したのである。

この預金膨脹の經過に於て、未だその極限に達して居ない或るときに、假に、既に預け入れられたる預金の一部が、現金を以て引出されたとすれば、それだけ支拂準備金を減少したのであるから、それを補充しなければならぬ。それは遊資たる部分の中より計算上に於て補充せられる。併し、この場合に於ては、減少したる額だけの

補充は必要でなく、預金も減少して居るのであるから、これに對應する準備金として不足するだけを以てすれば足るのである。

併しながら、支拂準備金として遊資の部分より控除せられたるだけ、遊資の金額は減少するのであるから、その後の貸出は減少し、従つて、その反轉によりて膨脹する所の創作的預金も減少することとなる。この意味に於て、苟も預金が、現金通貨を以て引出され、それが、流通界に滞留するとせば、然らざる場合に比べて、預金の膨脹を抑へるのである。すなはち、その引出されたる現金額を準備率を以て割りたる商に等しき額は、この引出がなければ預金として膨脹すべき筈であつたのに、それが引出されたるため、その額の膨脹が止められた譯である。

それゆゑに、小賣取引が隆盛となり、現金通貨の流通量が増大するならば、一方に於ては、貸出が増加するたゞめ預金の増勢が續く譯であるけれども、その膨脹は、曩に述べたる極限をもつものであり、その極限が、現金通貨の流通量の増加したるよりも幾倍の大さ——流通増加量を準備率を以て割りたる商——に於て、縮減するのである。

次に、預金の膨脹が、既に極限に達したる場合に、現金通貨を以てする預金の引出が行はるときは、その支拂に充てたる現金準備金の減少を補充すべき遊資は既に存在しない。然る場合に於ては、日本銀行の貸出に仰ぐの外はない。この場合に於て、日本銀行は、その貸出請求の形勢の如何により、割引若しくは貸付の利率を最低歩合より高くすることによつて、金融の統制を行ふこととなるのである。

日本銀行が貸出利率を最低歩合より高くするとき、市中銀行も亦その貸出利率を引上げざるを得ざることとなる。そして、それは貸出の回収を惹き起す。貸出が回収せられるときは、前に述べたる所の如く、預金が收縮を來すこととなるのである。それゆゑに、現金通貨を以てする預金の引出は、そのことによる預金の收縮たるに止まらず、更なる預金の收縮を惹き起すものであつて。前の場合と同じく。その收縮の程度は、準備率を以て。引出されたる現金通貨の額を除したる商にまで達するのである。

併しながら、日本銀行が、金融市場を引締める必要を認めず、その貸出利率の引上げをなすことなくして、貸出を行ふならば、市中銀行は、自行の貸出に對し利鞘を收めることとなるのであるから、貸出の回収を試みることはない。然る場合に於ては、預金の收縮は、引出されたる現金の額に等しく、そしてそれだけ現金通貨の流通量を増加したのである。若しこの場合に於て、この現金通貨が、日本銀行より貸出を受けたる銀行とは異なる所の銀行に預け入れらるゝこととなるならば、曩に述べた所の、日本銀行の貸出資金が、市中銀行の實質的預金となるのであつて、また、それが基本となつて、創作的預金としての膨脹を見る可能をもつのである。